

## 地域別山行記録

## 我が部と北海道の山々

昭和 29 (1954) 年～昭和 54 (1979) 年

## はじめに

信州大学は信州の山に囲まれた地にある。中でも伊那・松本山岳部は南アルプスと中央アルプスとに挟まれた伊那と、北アルプスの玄関口と言われる松本を本拠地としている。つまり、登る対象は身近に幾らも存在するのである。しかるに、信州から遠く離れた山々であるにも拘わらず、部員達はかなり早い時代から北海道の山々にまで登りに出かけていたようである。今（2006年）とは違い、入山口に行くだけでも列車に乗ってしかも乗り換えを重ねて少なくとも数日は要したことであろう。もっとも、昭和40年度春山では槍ヶ岳において、又、昭和43年度の各春山では黒部源流部において、それぞれ北海道大学のパーティーと出くわしたということであるので、逆も又行われていたのであろう。

私は昭和44年（1969年）に日高に入った。その後、我々の年代や続く年代の部員達が日高、知床、利尻へと信州から出かけていき、夏山だけでなく春山そして冬山の計画へと進んでいった。私の年代以前の先輩達が北海道（日高）に行ったという話は当時一つだけ聞いていた。しかし、今回、記録を辿ってみると、既に昭和29年に北海道の山への記録があった。これには驚いた。旧い新しいという問題ではなく「行ってみたい」という思いはどの時代も同じだったのであろう。

そこで、我が伊那・松本山岳部から遠き北海道の山々に出かけた記録を発掘し、ここにまとめてみることにした。末尾に日高山脈概念図を掲載した。なお、もしも掲載漏れがあればお許し願いたい。以下、敬称を略させて頂く。

小根田一郎

1. 昭和 29 年 (1954 年) 3 月 5 日～4 月 9 日  
積雪期利尻岳南稜登攀

メンバー：平沢行哉、小松英夫 (OB)、部外 5 名 (北穂会)

詳細は既に信州大学松本山岳部報告 No.1 に報告され、又、その要約が本報告 No.2 にも特別に掲載されているので、本稿では詳細を省略する。本稿の「我が部と北海道の山々」への記録として最も古いものと考えられる。当時の不便な時代に 1 ヶ月強にわたる強烈な山登り、畏敬の念を抱かせる記録である。

2. 昭和 39 年 (1964 年) 6 月 雄阿寒岳、羅臼岳  
メンバー：川崎 誠

この報告 No.2 の年代範囲の中で最も古い記録がこれである。ただ、昭和 39 年度に行われた個人山行の一つとして報告されている。単独で 4 ヶ月間の北海道滞在中にアルバイトをしながら登ったものらしい。「昭和 39 年度総括」の内でも「ややもすれば信州の山々にだけしか足跡を残そうとしない我が部からも、北は北海道、東北、近畿の山々と幅広く対象を求めるようになった」との記載がある。

### 3. 昭和40年(1965年)

昭和40年に発行された「OBだより」の巻末に、茅野文俊OBによる7月の大雪山(層雲峡から黒岳、北嶺、中岳、旭岳、勇駒別温泉までの縦走の試み)の投稿記事が掲載されている。その記事の内に次のような記載があるが、詳細は不明である。

「すでに北海道の山も小松、故平沢両先輩の利尻、中込君の十勝岳登山等があり、私もどこかへと…」

### 4. 昭和41年(1966年)8月9日～16日

#### 日高山行

メンバー：L中邨康文(5年)、宇都宮昭義(長野4年)、牧晃一(3年)

コース：静内～シュンベツ川～カムイエクウチカウシ山～八の沢カール～札内川

「昭和41年度山行報告書」に「個人山行」としてごく簡単に記載されているのみで、詳細は不明であるが、リーダーの中邨康文の記憶によれば、次のようであったとのことである。すなわち「入山は、静内営林署のアドヴァイスにより、材木搬出用トラックに便乗させてもらった(タバコ数個の礼をした)。沢登り主体の山行で、下部では、かなり厳しい廊下状があり、高巻きを強いられた。高巻きが終わらぬうちに激しい降雨があり、急激な増水のため、十分な広さはなかったが、斜面に適当なスペースを確保して、水が引くまで2日程待った。その後は、流木が多く、てこずりはしたもの、広さのある、緩く明るい沢を楽しんだ。岩魚も30cm級が釣れ放題の状態だった。上部は、徐々に傾斜も増し、狭い滑滝状をつめ、這い松帯に出て、背丈を超える這い松の枝を渡り、尾根に出た。持参したクレモナロープは、水には強いが、強度に不安があった。軽量化を考え、米を減らし、小麦粉(すいとん等で食した)を使ったが、腹持ちが悪くて困った。日程の8日間は、メンバーが落ち合って、準備をし、下山後解散するまでを含んだものである。全体としては、快適な山行だった。当初メンバーの内、福原氏は、所用にて、実

際には不参加となった」とのことである。

この日高山行は、この報告No.2の年代範囲のみならず、我が部から本格的に「日高」に目を向けて分け入ったパイオニア的なものと考えられる。そして、翌42年、44年と続く日高山行へのきっかけ・動機付けになった山行であるとも考えられる。

### 5. 昭和42年(1967年)8月17日～23日

#### 日高山行

メンバー：L村田譲治(3年)、寺沢三男(2年)、猪飼啓之(2年)

コース：

17日 静内～奥新冠ダムサイト

18日 ～幌尻沢～幌尻岳～トッタベツ岳～七つ沼カール～新冠川上部二俣左俣

19日 ～新冠川上部二俣～右俣～エサオマントッタベツ北カールボーデン

20日 ～エサオナントッタベツ岳～カムイエクウチカウシ山～八の沢カール

21日 沈殿

22日 ～札内川～コイカクシュサツナイ出会～帯広営林局札内治山事業所

23日 ～上札内農協前(下山)

前年に引き続き、日高に入っている。計画では、カムイエクウチカウシ山(カムエク)から、さらにコイカクシュサツナイ岳まで縦走の予定であったが、天気が悪く、断念したようである。本山行については、詳細な報告を残している。リーダーの報告として、地元営林署へ山行届を提出して国有林野入林承認をもらうには計画書三部が必要である点、入山口までのトラックチャーターに多額費用要する点、札幌での買い出しは思い通りにはいかない等の後々の教訓の他、「積雪期の山行意欲をかきたてられた」等の感想が記載されている。又、猪飼の感想として「しっとりと湿ったカールに咲き乱れる草花。釣れて釣れて釣れ過ぎて泣きたくなった岩魚釣り、濃霧の中静寂として緑をわって続く細い道。晴沈の日我がテン場を驚きの

渦にまき込んだクマの親子の出現……信州の井の中の蛙であった我々を、又違った山行意欲へと駆り立ててくれる原動力となってくれることを疑わない」と記載されている。なお、上記のクマ出現(三頭)は八の沢カールにおいて、又、「イワナを好きな程釣り上げ、1時間程遊んだ」のは八の沢上部においてである。この村田パーティーはカムエクに対し北側からアプローチしたものであるが、後の昭和44年には、次項の佐藤パーティーがこれとは逆にカムエクに対し南側からアプローチしている。

## 6. 昭和44年(1969年) 7月18日～28日 日高山行

メンバー：L 佐藤正敏(3年)、井関芳郎(3年)、  
鳥越洋一(1年)、小根田一郎(1年)

コース：

- 18日 静内＝元浦川～ニシュオマナイ川上の二俣
- 19日 ～右俣～神威岳(往復)～同右俣下降～同二俣
- 20日 ～左俣～中の岳
- 21日 ～中の岳直登沢下降～ペテガリ沢直

### 登沢出会い

- 22日 ～ペテガリ沢A沢～ペテガリ岳～ルベツネ岳
- 23日 ～ヤオロマップ岳
- 24日 ～コイカクシュサツナイ岳～七の沢カール上部



●左から(佐藤・鳥越・小根田)撮影：井関



●ペテガリ沢出会にて左から(鳥越・小根田・佐藤)撮影：井関

- 25日 ～カムイエクウチカウシ山～八の沢  
カール  
26日 ～八の沢出会い  
27日 ～札内川～林道工事最奥現場  
28日 =帯広

報告書はなく、上記のコース・日程は計画書記載のものである。小根田の記憶では、どこかで沈殿（おそらくペテガリ沢出会いにて晴沈）したかもしれない点、最終日は不調者を下ろすために八の沢出会いから一気に帯広まで下山した点を除き、ほぼ計画書記載通りの行動となった。7月13日に松本を出発し、札幌では北大の恵迪寮に泊めてもらい買い出しをした。17日に札幌から静内へ移動し、その夜はダルマストーブで暖かい作業小屋に泊めてもらった。翌18日早朝に木材搬出用のトラックに乗せてもらい入山した。神威岳～中の岳、中の岳～ペテガリ岳の間は、稜線伝いではなくて、東面の沢から沢へとVの字状に下りては上がるということを繰り返し、ピーク間を結んだ。ペテガリ岳以北の稜線には踏み跡があり、カムエクまでは稜線伝いに進んだ。稜線上では、北アでは見られない図太い這松が密生し、地面からかなり高い位置でその幹や枝の上を渡り歩いたり、水を調達するために、コイカクシュサツナイ岳のピークからはるか下まで降りて登り返さなければならなかったりと、なかなかだった。八の沢カールでカムエクの斜面を登るヒグマを目撃。距離が離れていたため安心してしたが、この同じ場所で翌夏に福岡大学ワングルパーティがヒグマに襲われて犠牲者が出ることになる。最初のニシユオマナイ二俣を出てから八の沢出会いまでの間で他パーティと出会うことはなかった。

食料としては米と調味料（味噌等）を主体にし、タンパク質は現地調達（岩魚期待）という計画だった。しかし、神威岳等の日高南部では釣れず、八の沢での岩魚釣りに期待したが、八の沢ではメンバー不調のため下山を急いだため釣りをすることができず、岩魚ゼロとなった。テントは無しでフライシートのみとし、登山靴と地下足袋を持参し

た。ワラジは静内にてしっかりしたものを購入した。

7. 昭和47年（1972年）3月15日～3月29日 知床縦走（羅臼岳～知床岬まで）

メンバー：L 大安徹雄（3年）、渡部光則（2年）、藤松太一（長野2年）

コース：

- 13日（3月11日松本発、新宿・青森・札幌経由）釧路  
14日 根室標津を経て羅臼着  
15日 羅臼～ルサ河二股付近のデポ地点往復  
16日 羅臼～第1岸壁～羅臼岳途中のデポ地点往復  
17日 羅臼～第1岸壁～昨日のデポ地点～羅臼岳・三の峰間コル  
18日 ～羅臼岳往復  
19日 地吹雪で沈殿  
20日 ～三の峰～サシルイ岳～オッカバケ岳～南岳  
21日 地吹雪で沈殿  
22日 ～東岳～ルサ川左股源頭～3/15のデポ地～ルシャ乗越  
23日 ～知円別岳直下～硫黄山～知円別岳直下  
24日 ～ルシャ乗越手前848mピーク～ルシャ川～ルシャ岳南西尾根稜線～ルシャ岳西面  
25日 ～二重山稜～知床台地南端～知床岳～ポロモイ台地～ポロモイ台地北端とサマツキヌプリ間のコル  
26日 ～サマツキヌプリ～ウイヌプリ手前766m東面  
27日 ～海岸～知床岬往復  
28日 ～サマツキヌプリ～モレイウシ川上流～河口～化石浜  
29日 ～ウナキベツ川河口～観音岩～崩浜～カモイウンベ川河口～相泊～建根

## 別～羅臼町

詳細は、別掲の「1972年 積雪期知床半島縦走記録」を参照のこと。

昭和29年以来の初の積雪期の北海道ということになる。スキーではなく、ワカンと雪洞を用いた縦走であり、おそらくはしごかれてくるであろうとの大方の予想を裏切って、チームワークの良さと割とあっさり成し遂げられてしまった。

## 8. 昭和48年(1973年) 7月29日～8月6日 日高山行

メンバー：L三坂健次(5年)、服部(現小松)幸雄(3年)、牧瀬敏裕(2年)、藤原一隆(1年)、古橋孝夫(1年)

コース：

29日 札幌～静内～コイボクシュシピチャリ川のシカシナイ沢出会

30日 ～コイボクシュシピチャリ川遡行～三岐(820m地点)

31日～8月2日 沈殿

3日 ～コイボクカール～カムイエクウチカウシ山～九の沢カール

4日 ～エサオマントッタベツ東カール～エサオマントッタベツ川 830m地点

5日 ～トッタベツ川本流との出会付近

6日 ～トッタベツ川橋～上清川～帯広

詳細かつ分厚い報告書を残している。7月26日に松本発で札幌ではS44年と同様に北大恵迪寮に泊まって買い出しをし、その間に服部が静内を往復して営林署の入林許可証交付と車の手配を行う。詳細な遡行図及び説明や各メンバーの感想はいうに及ばず、各メンバー別の岩魚の釣果表(合計40尾)及び岩魚釣りのタイプ、日高の蝶、日高の植物、ヒグマを含む日高山行で見た動物等についての詳細な学術的報告?も付帯する、立派な報告書を残している。悪天続きの後にカムエク九の沢カールでのまさかと思われた晴天、メンバーの一人藤原は感想文に「こんな素晴らしい夜明けが来ようとは誰が思っただろうか?…。昨日、そう昨日はつらかった。でももう過ぎたことだ。今、大空には雲一つ無く眼を西に向ければ眼下に雲海が見える。もうすぐ陽が昇るにちがいない。日高の山々はすみきった空の下にまんじりともせず、うずくまるようにそれを待っているかのようだった。…。4日続いた雨はきつかったが、この瞬間のためにあったのだとしか思えないようだった。昨日、冗談に、明日もし快晴になれば僕は神の存在を信じる、と言ったのだが、今、日高特有のナイフリッジの山稜に立ち、大空の中に風を聞いていると人間の小ささに対する大きな存在を信じられる」と記している。そして、エサオマントッタベツ東カールにて晴天の下、ゆっくりしようと



●コイボクシュシピチャリ川にて三坂と岩魚

したところで、ヒグマ発見。このため、撤収して、エサオマントツタベツ川に下った。

9. 昭和 49 年 (1974 年) 8 月 11 日～16 日  
中央高地 (富良野岳・トムラウシ)

メンバー: L 藤元治朗 (1 年)、佐竹義郎 (1 年)  
コース :

- 11 日 旭川～富良野～布礼別～登山口
- 12 日 ～原始原～富良野岳～上ホロ
- 13 日 ～十勝岳～美瑛岳～オプタテシケ～  
双子池
- 14 日 沈殿
- 15 日 ～コスヌプリ～黄金ヶ原～トムラ  
ウシ～ヒナゴ沼
- 16 日 ～五色岳～恵別岳～高原温泉～層雲  
峡～旭川

計画では石狩岳へ足を延ばす予定であったが、メンバーの足の不調で次の岩場定着合宿を控え大事をとって下山したようである。1 年生 2 名だけのパーティとはいえ、しっかりした報告書を残している。その中では、「アブ・ブヨには悩まされ続けたけれども、一体そんな事が何だと言うのか。荒涼とした噴煙の十勝岳、トムラウシでお花畑の続く黄金ヶ原、湖面に星影揺れるヒサゴ沼、遙か青い日高に再来を約し、僕達は秋のしのびよりつつある花枯れの大雪を後にした」と感慨にふけり、「ワザワザ北海道まで行って本当によかったと思っている。ヤッパリ、岩登りばかりやってないで、原始性の深い山行もいいんだろうナ。天の恵み深き土地を求めるべきなのだ。来夏は日高か知床かもっとヘンピな山に行きたく思っている」と魅せられたようだ。そして、上記報告書には、「(補足)～スキー縦走についての考察～」という小論を添付し、「今回、中央高地を縦走したが、積雪期の下見も兼ねた積もりである」と述べて、北上コースをとる場合、南下コースをとる場合、北アとの比較、スキー縦走の方向性、想定目標等について検討している。

10. 昭和 49 年 (1974 年) 10 月 5 日 利尻岳  
メンバー: 牧瀬敏裕 (3 年)、鈴木 (部外)

昭和 49 年冬前に発行された「49 年度 OB 通信 # 2」に、秋山報告として上記の牧瀬の利尻岳の記載がある。

そして、同 OB 通信には、「Ⅳ 冬山」と題して、「毎年、冬山の対象を決めるのが遅く、問題になっているのですが、…、盛んな討議の結果、近く利尻を積雪期にやろうということを前提に、今年は穂高の冬の稜線を歩こうということになり、同封の様な計画ができ、…」というように、冬山という部の総力をあげる山行の対象として利尻岳がその選択肢の一つに挙げられるようになっていることが伺える。この年度は、4 年の服部幸雄 (現小松幸雄) をチーフリーダーとして 3 年の吉田秀樹がサブリーダーを務めている。

11. 昭和 50 年 (1975 年) 3 月 7 日～16 日  
日高スキー縦走

メンバー: (全体) CL 福島 渉 (3 年)、SL 吉田秀樹 (3 年)、須貝与志明 (2 年)、豊田信行 (2 年)、井上雅子 (1 年)、岡本真一 (1 年)、左山幹雄 (1 年)、藤元治朗 (1 年)、二俣勇司 (1 年)

コース :

- 7 日 静内～新冠ダム～間違っモウレル林道に入り引き返す～奥新発電所
- 8 日 ～ルイベツ岳よりの沢と林道とのぶつかった所にある廃屋
- 9 日 沈殿 (翌日より A パーティー・B パーティーに分かれて行動)
- 10 日 [A パーティー: L 吉田、豊田、井上、左山、岡本]  
～奥新冠ダム～上の二俣～1400m 地点  
[B パーティー: L 福島、須貝、二俣、藤元]  
～奥新冠ダム～1410m ピーク～滑若岳への稜線上 1450m 付近



●トッタベツ（戸鶯別）岳頂上にて  
後列、左から藤元、福島。  
前列、左から須貝、豊田、二股、岡本、左山、吉田。（撮影者：井上雅子）

- 11日 [A パーティ] ～森林限界 1600m～幌尻岳より延びる主稜上 1950m 地点  
[B パーティ] ～ナメワッカ岳
- 12日 [A パーティ] ～幌尻岳～戸鶯別岳～戸鶯別岳東コル  
[B パーティ] ～国境～エサオマン  
トッタベツ岳～最低コル手前
- 13日 [A パーティ] ～1,791m ピーク～カムイ岳～戸鶯別岳東コル  
[B パーティ] ～カムイ岳～戸鶯別岳東コル (A パーティと合流)
- 14日 ～戸鶯別岳～1,916m ピーク～ピパイロ岳手前のコル
- 15日 ～ピパイロ岳～1,791m ピーク～営林署小屋
- 16日 ～上美生＝茅室

3月であるため、厳密には昭和49年度の山行となる。昭和47年の大安パーティーによる知床の次の積雪期山行であるが、今回はスキーを用いるようになっている点で大きく異なる。報告書の

リーダーの言葉として「1月も終わろうとする頃、全く思い付き的な発想で、ポツとデッチ上げた様な“日高”という山域、メンバーも寄せ集めで、“日高”の基に集まったものではなかった。そして、十分な調査、問い合わせもできないまま、ビクビク“地図と本でしか知らない山”に入ったのだが、好天に恵まれ、ナントカ予定を消化し、無事下山できた事は、何よりの喜びでした。1年生を5人も含む9人で、慣れないスキーを使って、ツェルト・雪洞を中心とした山行ができたんだから。下山日に、谷筋からだっ広い雪原を滑って、やっとスキーを脱いで、ピパイロへの長い道をシートラして歩き始めた時のあの気持ちはわすれられない」と記載されている。とはいうものの、この山行に備え、2月には梅池で雪洞利用によるスキー練習を7日間にわたって行っている。

## 12. 昭和50年（1975年）3月20日～24日 利尻岳偵察

メンバー：L 吉田秀樹（3年）、豊田信行（2年）、

二俣勇司 (1年)、岡本真一 (1年)

コース :  
20日 鬼脇～ヤムナイ沢 450m 地点～東稜  
1100m 地点  
21～23日 沈殿  
24日 ～ヤムナイ沢 450m 地点～鬼脇

上記の日高スキー縦走の下山後に利尻に転進し、将来の冬山のために偵察に入っている。だが、報告書で吉田は「北海道付近に停滞した低気圧の為、登頂は出来なかった。8年ぶりの好天続きの最後の日に入山したのは運が悪かった。もう1日早く入山していたら、登頂出来たかも知れない。しかし、それがよい教訓になったのは当然である。僕らは冬山合宿としての利尻の可能性について多くの期待を持っていたが、現在、部員全員がわざわざ登るだけの価値があるのか疑問に思っている。確かに天気も悪く部分的にはむずかしいがスケールの点ではなほだ不満足がある。しかし、…。しかし、アタックして1,100m 地点からの海岸線、イソの香り、それらが今も貴重な思い出として僕の心の中に残っているのは否定できない事実である。…それが、『利尻岳登山』のすべてであったといえるのかもしれない。それでよいと思う。今は」と述べている。

### 13. 昭和52年(1977年) 3月2日～8日

知床半島スキー縦走

メンバー：L 藤元治朗 (3年)、二俣勇司 (3年)、  
下田 章 (2年)、田中誠司 (1年)

コース :  
2日 (2月28日松本発、糸魚川経由で青森・札幌) 帯広・釧路を経て羅臼着  
3日 羅臼町～956m 峰～羅臼岳・三つ峰間のコル～羅臼岳往復～三つ峰～三つ峰・サシルイ岳間のコル  
4日 ～サシルイ岳～オッカバケ岳～南岳～知円別岳～硫黄山往復～東岳～ルシャ岳～ルサ乗越  
5日 ～トッカリムイ岳～知床岳～ポロモイ

岳

6日 ～知床岬往復～ポロモイ岳～知床岳  
7日 ～ルサ乗越～ルサ川  
8日 ～羅臼

報告書等はなく、クラウン峰に逝った故二俣勇司の追悼集等に断片的な記載がある。リーダー藤元が当時の手帳に記録したのから転載・引用すると、2日に羅臼の街はずれに雪が降り出す中、テント泊した後、3日には羅臼川に沿って登り、羅臼岳から南東に張り出す尾根に取り付いて965m 峰北西コルに到達。4日は東岳までアイゼンで快適にとぼした後、1,200m 付近からルサ乗越まで水平距離約4,000m 以上を快適にスキー滑降。「こんなに長い快適な滑降は経験したことがない」「右に太平洋、左に流水のオホーツク海がみえる雄大な景色で国後がすぐそばに感じた」と記している。又、ルサ乗越では夕方から翌明け方までは吹雪・強風により4人が座った姿勢のままテントを支えた。翌5日朝、風がおさまったので、知床岳までアイゼンにて、ポロモイ岳までの下りはスキー滑降にて進み、6日には稜線よりオホーツク側、半島北側海岸に降り、流水の上をしばらく歩いて海岸にもどり海岸伝いに知床岬着。当初予定では海岸沿いに流水上をスキーで北海岸のウトロまで、と予定していたが、流水状態を見て断念し稜線に戻った。7日はルサ川沿いに半島南岸を目指し、途中で「桃源郷」の如き雪原が開けた気持ちのよいところがあったため、午前中に行動を終了し、のんびり休養。8日に林道を経て羅臼に戻った。昭和47年にワカンで入った大安パーティーから、ようやくスキーを用いた山行が“普通”になっていることが伺える。

### 14. 昭和54年(1979年) 2月25日～3月4日

知床半島スキーによる一周

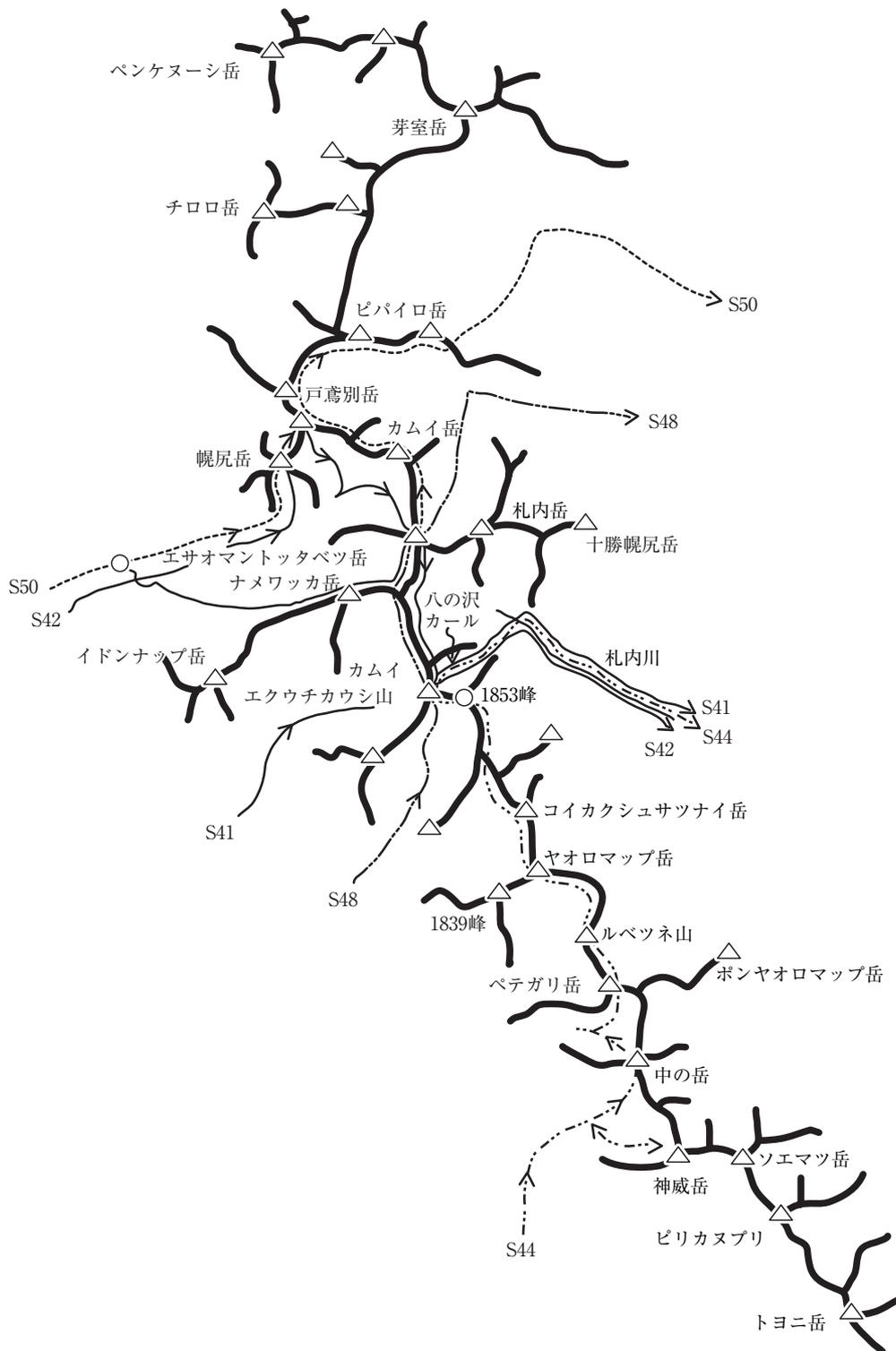
メンバー：L 田中誠司 (3年)、島谷 寿 (2年)  
石渡健司 (1年) 川原 修 (1年)

コース : 宇登呂から建根別まで一周  
(2月23日松本発、上野から夜行に

- て青森・札幌・網走駅にて泊)
- 25日 網走～斜里～ウトロ～幌別～岩尾別  
～イタシュベツ川(知床五湖の先) T.S
- 26日 T.S～知床大橋～ポンプタ川～ルシャ  
川 T.S (ここまで知床林道)
- 27日 T.S～テッパンベツ川～流水上～オキ  
チウシ川(番屋泊)(流水上は歩き易  
い沖に出る)
- 28日 ～イタシュベワタラ～アウンモイ～  
磯浜～ホロモイ～岬の台地へのルン  
ゼを登る～文吉湾～知床岬 T.S (イ  
タシュベワタラ等では流水のセラッ  
クの無いところを歩く。岬の方の流  
水に波が見える。)
- 3月1日 T.S～赤岩～カブト岩～念仏岩～  
雄滝(番屋泊)(T.Sから海岸沿いに  
スキーを引いて歩く。カブト岩から  
の行程で220m高巻き・フィックス、  
高巻き)
- 2日 晴沈
- 3日 ～ペキンノ鼻前～モレイウシ～ルンゼ  
下ると化石浜 T.S (ペキンノ鼻前へ  
の行程で高巻き、モレイウシから巻  
いた)
- 4日 T.S～観音岩～相泊～ケンネベツ＝羅  
臼(観音岩の前後共、高巻き)

報告書等はなく、記録はリーダー田中誠司によるものである。そして、リーダーの田中誠司は、次のような感想を残している。すなわち「スキーが足となるように訓練できた。特に知床林道と流水の上は役立った。流水は、岸近くではセラックのようになって歩きづらく、かなり沖まで出た方が歩きやすかった。海上の氷は、大きなハス状の島がつながっていて、つなぎ目がしっかりしているところを見極めて歩いた。シャーベット上で水混じりの所はプカプカして危険だった。重荷を背負っていたためトップで氷にヒビが入り、ツバイが腰まで海にはまったこともあった。常に慎重さが求められた。流水の上にはキタキツネの足跡が、沖の海からはアザラシが見られた。また、半島ではヒグマが、岬ではオジロワシが近くで見ることが出来る別天地だった。オホーツク側はスキーが快適だったが、根室海峡側は岩場の高巻きが多くスキーが邪魔で辛かった。今回の半島一周は、スキーが少しできれば何とかなるが、重荷を担いだ冬山登山の経験がないとできなかったと思えた。また、何時の日か後輩にチャレンジしてもらいたい」とのことである。

以上で報告 No.2 の年代範囲である昭和 53 年度までの記録は終了である。最後に日高山脈概念図を掲載する。



日高山脈概念図 年代別にトレースを表示している